

「モンゴル研究のフロンティア」シリーズ 第3回

世界のモンゴル、モンゴルの世界
—カルムイクから見た世界

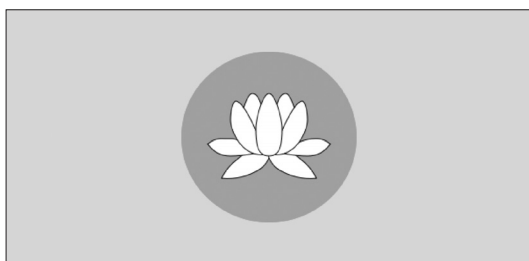
モンゴル研究家 荒井幸康



カルムイク人とは

モンゴル系の人々がいるのはモンゴル国とその周辺だけではない。アフガニスタンやキルギスタン、果てはヨーロッパにまで散らばって住んでいる人々がいる。それらすべての人々を紹介するにはいささか時間が少ないので、ヨーロッパと呼ばれる地域に住んでいる珍しいモンゴル人を紹介したい。彼らをカルムイク人と呼ぶ。

カルムイク人の多くはロシアの中にある民族の自治地域カルムイク共和国に住んでいる。カルムイク共和国はヨーロッパ



カルムイク共和国の旗

パロシヤ地域南方に位置し、北にはボルガ河が流れ、東がカスピ海、南にはダゲスタン共和国があり、西に『静かなるドン』で有名なドン河が流れている。ウラル山脈以西にあるこの共和国はヨーロッパ側のロシアにある。面積は7万6千平方キロメー

トルである。これは現在の数値で、1920年にカルムイク自治州として成立し、35年に社会主義自治共和国となり、43年に人々が強制的にシベリアに移住となり解体された後、58年に再建され、現在に至るまでにはかなりの変遷を辿っている。人口は約32万人。その内、首都エリスタの人口は15万人ほど。エリスタとはカルムイク語、そしてモンゴル語でも同様に「砂が多い」ということを表している。豊かな土地をロシアやウクライナ、ドイツなどからの移民に奪われた結果、痩せた砂の多い大地だけが残ったことを表しているようでもある。カルムイクには新疆や西モンゴルに住



ロシアにカルムイクが帰属してから400年を
記念するエンブレム

むオイラート系の人々と同じ部族の人々がすんでいる。トルゴート、ドルブトという2つの大きな部族があり、その他にはホシヨートとよばれる部族もいるが、今はほぼ上記の2部族に同化されている。また、カルムイク独自の部族もいる。ブザウと言われるこの部族は、主にドン・コサックとともに暮らした人々である。

カルムイク人、あらわる

17世紀初め、西モンゴルではジュンガル部と呼ばれるモンゴル系の人々の国が

大きな勢力を持ったが、その中で起こった内紛が原因で、1609年、ロシア人と接触したモンゴル系の人々がカルムイク人と呼ばれる。

これによってロシアは、これらの人々は自分たちの帰属下に入ったと主張するが、いろいろな記録を検討すると、よりよい草原を求めてやってきた人々でもあるようだ。

再三のロシアの制止も聞かず、だんだんと西へと移動していき、ようやく落ち着いたのが1630年ごろ。今あるカルムイク共和国を含め、北や西にも大きく張り出して、広大な土地を占めていたようである。

ロシアがカザンハン国を壊滅させたのが1552年、アストラハン国を併合したのが1556年とするなら、ロシアにとってはまだ新しい土地であり、モンゴル系の人々の西進を跳ね返せる力もなかった。どちらかといえば、この地域のイスラム教徒の精力を割き、不安定な状況を取り除くための食客的な役割を結果的に期待したとも取れなくもない。北カフカス地方の西にドン・コサック、東にカルムイク人を置いて北のロシアと南

のペルシャやオスマン帝国、クリミアハン国などとの緩衝地帯としたともいえるだろう。

顔は我々に非常に似たモンゴロイドの顔立ちである。もちろん、北カフカス地域、ボルガ河周辺には様々な民族があり、何代前かをさかのぼるとチュルケス人の血があるだとか、今はこんな（アジア的な）顔をしているが、7、8代前、カルムイクの集落に逃げていたロシア人であったとかというエピソードを持つ人々がたくさん住んでいる。顔立ちが似ていても、目が青かったり緑だったりする人に出会うことがある。新疆やモンゴルに帰ってきている人たちもいるからか、そういう人々はモンゴルでも見えずぐにわかる。知り合いにもいるが、やはりカルムイクの同族が住む西モンゴル出身である。

彼らの民族の言語であるカルムイク語はモンゴル語系の言葉である。遠くモンゴル、より詳しくは現在の中国の新疆や青海省あたりから離れ、ここにたどり着いたのだが、周りには遠い親戚となるような民族がいるわけでもなく、この地域では唯一のモンゴル語系の言葉である。

さらに、彼らは故郷から仏教を持ち込んでおり、イスラム教、キリスト教を信奉する他の人々が住むこの地域では、宗教

的にも際だった存在である。その仏教も、社会主義時代には他の宗教同様抑圧され、様々なところにあった寺院も社会主義時代には0にまでなった。その後、90年代になって、仏教寺院は各地域に着々と再建されている。

顔立ち、言語、宗教どれをとってもカラムイクは「ヨーロッパ」と呼ばれる地域の中で特異な位置を占める民族といえる。

その最盛期と新疆への帰還、 残された人々

その後、17世紀の終わりから18世紀、アユーキが首長として登場すると、カラムイクは最盛期を迎える。周りにも一目を置かれる一大勢力となった。遠くチベットのダライラマに使者を派遣し、1697年、「ハーン」の称号を賜った。同時代、ロシア帝国ではピョートル1世が皇帝の座にあったが、アユーキとの「同盟関係」を確立したことで、心置きなく長期間北方への戦争に邁進することができたともいわれる。両者は、南方で共同戦線を張った時に2回会見している。

しかし、アユーキの死後は、後継者争いなどで紛糾し弱体化したこと、ロシア

が要塞などの強化を行ったことやボルガ・ドン河流域への移民の増大、カザフ人の伸長、そして最後に、つかず離れずの関係にあった同族のジュンガル部の壊滅などがあり、次第に勢力を失っていった。

1771年、ウブシ・ハーンは故郷である現在の新疆への帰還を決意、多くがこの地を去って行った。当初は、帰還後、新疆で新たな国を建てることを夢見たようであるが、道中で、カザフ人やコサックなどの多くの襲撃に遭い、結局は清朝の帰属下に入った。

ボルガ河畔に残された人々は完全にロシアの支配下にはいることになる。

また、カラムイク人の帰還直後生まれた真空状態によって、この地域は不安定化し、ブガチョフの反乱の一時的な成功の要因にもなったとされる。

カラムイクとは、テュルク系の言葉で「残った(人々)」という意味である。よくこの時にボルガ河の地域に残ってしまったので名づけられたのだと誤解している人々がいるが、それは誤りである。新疆ではまだその意味で使われ続けているので、新疆にいるモンゴル系の人々は自分たちのことをこの名前で呼ぶのを好まないが、「イスラム教を受容せずに残った人々」という意味の、ある種差別的な言

外の意味を含んだ言葉なのである。そのような意味では、もともとは一般的に使われていた言葉が、頻繁に言及されることによってついには固有名詞に転じたものということもできるかもしれない。

新疆の人々は自分たちを「モンゴル人」あるいは「オイラト人」と呼ばれることを好むが、もともとカラムイク人も自分たちの間では、部族名である「トルゴート」、「ドルブッド」、「ブザウ」あるいは「オイラト」と認識していたようである。1918年、カラムイク人たちが最初に出した新聞の名前は「オイラディン・ザンギ」つまり「オイラト報」であった。逆に、赤軍のカラムイク語新聞は「赤いカラムイク」という名前であった。ロシアとのやり取りにおいても内向きの名前と外に向かったの名前を使い分けていたようであったが、この状況はその後1943年の強制移住が行われるまで、長く続いたようである。

カラムイク人は、清朝時代に仏教によって骨抜きにされたとされるモンゴル地域の人々と違い、軍人としての誉れを現在でも保っている。一つは周りを敵に囲まれている状況がそうさせたといえるかもしれないが、多くのカラムイク人が帰還した後でもその軍事力がロシアによって



ナポレオン戦争来のカルムイクの騎兵

期待されたことも原因といえるだろう。食客あるいは「同盟関係」にあった時代から、ロシアの要請により、騎馬隊があちらこちらに派遣されている。さきほどのスウェーデンとの北方戦争のときもそうであったが、19世紀初めのナポレオンとの戦争時にも、騎馬隊が活躍している。最終的に、カルムイク人の騎馬隊は、フランス軍を追い、パリまで入っていた。フランスのレストランの一形態である「ピストロ」はロシア語起源であることは有名であるが、ロシア人よりも気の短い、カルムイク人たちがさかんにフランス人をせかしたところから来た言葉ではないかと、カルムイク人の間では冗談めかしてよく言われる。

19世紀、移民がさらに増加し、カルムイク人の遊牧していた地域はほとんど召し上げられていった。

1850年代、カルムイク人地域を調査したコステンコフは、カルムイク人は同化し、間もなく滅亡するだろうとの観測も述べていた。遊牧では暮らせなくなり、ボルガ河畔では漁業を営むものも出てきた。内陸では農業に従事する者も出てくる。生活形態にも変化が現れてきていたのである。

ロシア革命起るー運命の変転

こうして、カルムイク人たちは1917年、ロシア革命を迎える。

赤、白両軍が、北カフカス地域でも、多くの人を自分たちの側に付けようと必死になる。その過程で、レーニンがカルムイク人たちに、もしこの戦争に勝てば、自治を与えようと約束する。コサックとともに長く生活したもの、特にブザウの人々は白軍に参加するものが多くいた。また、激戦が繰り返される地域にあった

がため、支配者がコロコロと変わり、それが故に、最終的に赤軍側にいたものでも、白軍にいた経歴を疑われ、後に大粛清期に標的になったひとびとが多くいた。

1920年、カルムイク人たちの全体会議が行われた後、自治州が成立する。実は、この自治州が成立する際にもロシア人たちの利益が、領土を引き裂こうとしていたことが、『ムドレシキン・スイン』という、革命後に現れた初めての現代小説に描かれているのである。しかしロシア人たちが酔っぱらわせ、草原の上で、カルムイク人たちがそれぞれの部族が均等になるように役職を割り振って、スタブロボリ、ロストフ、アストラハンという別の行政区画にあったものを、一つにまとめ自治州を成立させることができた。

ロシア革命後の内戦期、南ロシア、北カフカス地域は激戦地の一つであった。皇帝に忠誠を誓ったコサックは白軍側に立って戦った。それはドン・コサックとともに暮らしたカルムイクの人々、主にブザウの人々も同じであった。形勢が赤軍側に有利になると、彼らは住み慣れた土地を離れ、ロシアを出ていかざるをえなくなる。多くの人はクリミアより船でトルコに



ベオグラードに立てられた仏教寺院の様子

逃げた。南極探検で有名なナンセンの尽力により難民は、当初、人道的な支援を受けられたが、すぐに数年が経過し、自分で生活することを求められた。彼らが移民先として選んだのは、ロシア語と似たスラブ系の言語を話す人々がいるブルガリア、ユーゴスラビア、チェコスロバキアなどであった。さらにそこからドイツやフランスにも移住する人々が現れた。第2次世界大戦末期、カルムイク人の兵士がブルガリアを訪れたところ、自分たちによく似た人に出会った。話を聞いてみると彼らは亡命した人々だったというエピソードもある。

なお、ユーゴスラビアに落ち着いた人々

はベオグラードに仏教寺院を建設している。1929年から1943年まで、その仏教寺院は存在していた。トルコでも、ベオグラードでも仏教徒のネットワークが存在しており、その援助も微弱ながらあったようである。ベオグラードの仏教寺院には日本から送られた仏像もあったといわれる。

また、特にチェコへ移住していった人々の活動は盛んであった。多くのロシア人亡命者たちがいたことも活動を盛んにさせたことの一端であったかもしれない。インテリの中心人物ともいえる、エレンチェン・ハララダワーンは『軍団の指揮官としてのチングス・ハン』（1929年）という作品を書いているし、『ホンホ』（鐘）という雑誌も出していた。

なお、この『軍団の指揮官としてのチングス・ハン』は、日本人の手により1936年、日本語訳が出版されている。

第2次世界大戦—さらなる変転

1939年、ドイツがポーランドに侵入、第2次世界大戦が起こる。その後、

成吉思汗傳

社員會叢書第十九輯
エレンシンハラダワーン著
本間七郎譯

カルムイク人が出版した「指揮官としてのチングスハン」の日本語版

瞬く間に西部のベネルクス三国や、ノルウェー、フランスを占領したドイツは、1941年6月、ソ連との間に戦端を開く。1942年に、モスクワやペテルブルグではなく、ウクライナに向かったドイツ軍部隊は、カルムイク共和国の首都エリスタにまで到達する。

到達した部隊の中には、ナチス・ドイツに協力した亡命カルムイク人たちもいた。スターリングラードの戦いに負けたことがきっかけになり、ドイツ軍は転進を余儀なくされることになったが、カルムイクにいた部隊も撤退する。

ソビエト連邦政府を嫌い、その時一緒に逃げたカルムイク人も多くいた。カルムイク人ではないが、ソ連のモンゴル研究者のニコラス・ポッペもこの時にドイ

ツへと去っている。

激戦は終わったとはいえ、戦争の傷の癒えない1943年12月28日、スターリンの指令により自治共和国が解消される。戦線で戦うカルムイク人を含め、全てのカルムイク人はシベリアへと送られた。罪状は「ドイツへの戦争協力」。はたしてドイツへの戦争協力は存在したか、また亡命カルムイク人ばかりでなく、亡命したロシア人の中にもナチス・ドイツへの協力者はいた。しかし、この時期に強制移住させられたのは北カフカスの民族に集中している。

ボルガ地域などに住むドイツ人はともかくとして、ドイツ軍に協力したのもいたウクライナには何のおとがめもなく、勿論ロシア人にしても民族として何の罰も与えられなかった。

あるカルムイク人は「スターリンはヨーロッパ地域からアジア系を全て追い出したかったのだ」とも言っている。いずれにしても、民族がすべて残らず味わった強烈な体験は、それまで、部族単位で自分たちを認識していた人々をカルムイクという一つの名前へと誘ったといわれる。

強制移住は、何の予告もなく行われ、多くの荷物を運び出すこともできず、真冬に外で長い時間を過ごす準備もするこ

とができないままに多くの人が、列車に積み込まれ、シベリアへと送られた。列車の中で子どもや老人が飢えや寒さのために多勢死んでいった。はっきりとした数は分からないが、半数近くがなくなっただというデータもある。いずれにしてもその当時のカルムイクの人口は、現在と変わらないぐらゐの数字である。ということは長い年月を経て、現在ようやく、当時と同じぐらゐの人口になったということだけは確かなのである。

こうして、シベリアに送られた人々のなかには、家族がバラバラになることもあった。というのも、たまたま子どもが買った物に出かけていたときに兵士が来たのだとか、親戚の家に母親が遊びに行っていたからだとか、父親が兵士として前線で戦っていたからだとか、というような事情で、送られたときにバラバラであったからである。

こうして、シベリアの西側、クラスノヤルスクやノボシビルスク、トムスク、オムスク、チュメン、アルタイといった諸州にバラバラに送られた人々は、5、6年の内にそこから、中央アジアのキルギス、西カザフスタン、セミパラチンスクなどや、東シベリアのイルクーツク、ヤクートさらには日本人たちが去って

くことで労働者がいなくなっていたサハリンなどへと送られた。

2000年秋、サハリンから帰ってきた人々の集まる、サハリン・カルムイクの会に参加する機会に恵まれた。2回目となるこの会にも70、80人の人が集まった。日本人だと分ると、色々な話をしてくれた。仏教のお寺があることは知っていたがソビエト政府の目が怖くてお参りできなかった話、日本人が仕事熱心であった話や、学校の先生が通ると日本人の子どもたちはどうしたか、あるいは一緒に石蹴りをしたことなどを語ってくれた。

強制移住は辛い思い出であったかもしれないが、そこに集まった多くの人々とって子ども時代や青春を過ごした場所であった。だから、今になると懐かしく輝いて見えるようである。彼らが自分たちの思い出を語るときの顔をみるとそのように思える。

このサハリン・カルムイクの会の会長サガエフ氏はいつか、サハリンでの体験にかんじて本を書きたいといっていた。彼は今でこそ大学の法学部の教授であるが、その当時は日本人が敷いた鉄道の管理をしていたそうである。敷かれていたレールはカナダ製であったり、イギリス製であったりしたという事実を彼から聞



カルムイク共和国エリスタ市にある強制移住の記念碑

かされた。
スターリンの死後、1957年1月1日、カルムイクの自治州再建が許された。故郷を知らず、シベリアで生まれた子どもたちもすでに13、14歳になっていた。彼らはバラバラに住まわされたおかげで、旧来

の習慣を忘れ、言語を忘れたものもいた。強制移住は民族文化に大きな傷を残したということがいえよう。

移住先である程度の成功を収めた人々の中にはいた。しかし、故郷に戻れると知ったとき多くの人が、今いるようやく住み慣れて来た環境を捨ててもやはり戻ろうとした。

こうしてほとんどの人が故郷に戻り、故郷を再び作り上げていったのである。

こうしてカルムイク共和国が再建されて、すでに50年以上の歳月が過ぎた。毎年毎年、強制移住先を訪ねるツアーが催されたりはしているものの確実に強制移住の記憶は薄れつつある。記憶を残すために回想録や公文書集などが出版され、強制移住させられた12月28日は今、「記憶すべき日」としてカルムイク共和国の休日となっている。

第2次世界大戦以降—アメリカへたどり着いたカルムイク人たち



ニュージャージー州にあるカルムイク・ロード

第2次世界大戦末期、押し寄せるソ連軍を避け、カルムイク人たちはブルガリアやユーゴスラビア、チェコから西へと逃避行する。祖国から亡命している人々にとって、祖国からの軍隊との遭遇は、裏切り者として捕まれば、どのような目にあわされるかわからない恐怖を意味した。

こうして多くがアメリカ占領下のミューンヘンへとたどり着き、そこで改めて移住先を探すことになった。しかし、ヨーロッパに新たな移住先は見つからない。アメリカに行ければ行きたかったが、日本をはじめとしてアジア系の人々の移民

を排斥する政策をとっていたため、望みはなかった。結局、先に移民していたコサックの人々の強力な支援によって1951年、アメリカへの道が開かれた。コサックの人々が300年、ボルガ河畔に住んでいたため、顔はアジア系だが、遺伝的には白人であると主張し、それが認められたことが理由とされている(なお、アジア系移民排斥法は翌年に撤廃)。

コサックの人々が住んでいたニュージャージー州にカルムイクの人たちも住んだ。最初に建てた仏教寺院のある道は、この地に移住できたことを記念してカルムイク通り (Kalnmuk road) と名付けられている。

アメリカに移民し、落ち着きを取り戻したカルムイク人の中には、すぐさま、ソ連によって強制的に故郷を追い出されたカルムイク人たちのために活動した人々もいた。1955年にはインドネシアのバンドンで行われた非同盟諸国会議でこの話題を取り上げ、ソ連を非難するよう働きかけた人々があり、国際的な仏教組織に呼びかけたり、国連で訴えたりする人々もいた。

1957年、カルムイクの自治が再び許された背景に、このような国際的な働きかけが影響したのかどうか、それははっきり示す証拠はないが、なかったとも言い切れない。

おわりに

1980年代末、ゴルバチョフにより、ソ連と中国の政治的関係が改善されることにより、両国間の西モンゴル系、つまりカルムイク系の人々の交流が再び始まった。さらに、アメリカや西ヨーロッパに住むカルムイク人とソ連のカルムイク人との交流も始まった。

1609年のロシアとの最初の接触の記録から400年以上がたち、カルムイク人はその歴史的経過や住む地域の状況から、アイデンティティが、カルムイク人、オイラト人あるいはモンゴル人と様々な形ではあっても、同胞であるという認識を持っている。

エリスタに住むある友人の開いているインターネットのチャットを通じて、会話を楽しむ人々の相手の中には、モスクワ、ドイツ、チェコ、それにアメリカに住む人々がいる。ここで使われている言語は、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、そしてカルムイク語である。アメリカとドイツに住むカルムイク人の間ではドイツ語で会話がなされ、アメリカ

とエリスタではロシア語で会話がなされると言った具合に多くの言語が錯綜している。

ある民族が散り散りになった状態でありながら、同胞の意識を保ち続けている状況をディアスポラというが、1990年代以降、自由に行き来ができるようになったこれら「カルムイク」ディアスポラの人々の間にも段々と交流のネットワークが広まりつつある。

(2014年12月15日・公開フォーラム)

講師略歴(あらい ゆきやす)

1969年 東京都生まれ

2004年 一橋大学言語社会研究科

博士課程修了

博士(学術)

モンゴル諸語の近現代史

専攻

現在 亜細亜大学、芝浦工業大学、青山学院大学、一橋大学、東京大学兼任講師